

地域おこしとしての雛祭り

徳島県勝浦町のビッグひな祭りの事例を通して

Hina-doll Festival to Revitalize Communities : A Case Study of
the Big Hina-doll Festival of Katsuura Town in Tokushima Prefecture

山田 慎也

YAMADA Shin'ya

はじめに

①地域おこしと民俗

②地域の環境と生業

③ビッグひな祭りとその実施組織

④イベントの正統性とその資源

⑤広がるイベント

⑥結びにかえて

【論文要旨】

本稿では、徳島県勝浦郡勝浦町のビッグひな祭りの事例を通して、地域固有の特徴ある民俗文化ではないごく一般的な民俗が、その地域を特徴付けるイベントとして成功し、地域おこしを果たしていく過程とその要因について分析し、現代社会における民俗の利用の様相を照射することを目的としている。

徳島県勝浦町は、戦前から県下で最も早くミカン栽培が導入され、昭和40年代までミカン産地としてかなり潤っていたが、その後生産は低迷し、他の地方と同様人口流出が続いていた。こうしたなかで、地域おこしとして1988年、ビッグひな祭りが開催され、途中1年は開催されなかったが、以後現在まで連続して行っている。当初役場の職員を中心に、全国で誇れるイベントを作り出そうとして企画され、その対象はおもに町民であった。しかも雛祭り自体は勝浦町に特徴あるものではなく、また地域に固有の雛人形を前面に出したわけではない。各家庭で収蔵されていた雛人形を、勝浦町周辺地域からあつめて、巨大な雛段に飾ることで、イベントの特性を形成していった。

さらに、町民が参加するかたちで、主催は役場職員から民間団体に移行し、開催会場のために土地建物を所有する。こうして民間主催のイベントにすることで、行政では制約が課されていたさまざまな企画を可能とするとともに、創作的な人形の飾り方を導入することで、多様な形態での町民の参加が可能となり、その新奇性からも町内外の観覧者を集めることに成功した。そして徳島県下から、近畿圏など広域の観光イベントとして成長していった。さらに、このノウハウとともに、集まった雛人形自体を贈与し、地域おこしを必要とする全国の市町村に積極的に供与することで、全国での認知も高まっていった。

こうした状況を生み出す背景となったのは、実は戦後衣装着の人形飾りを用いた三月節供の行事が全国に浸透し、大量に消費された雛人形が各家庭で役目を終えたままとなっているからであり、それらを再利用する方法がみいだされたことによる。さらに自宅で飾られなくなった雛人形を観光を通して享受していくという、民俗の現代的な展開をも見て取ることができる。

【キーワード】 雛祭り、国民儀礼、地域おこし、NPO法人、節供、ビッグひな祭り

はじめに

近年、地域振興を目的として、さまざまな民俗を素材としたイベントが開催されている。多くのイベントはその地域に特徴のある民俗を利用することで、他の地域との差異化をはかり、イベント開催の正統性と独自性を主張することが可能となる。

しかし、ここで取り上げる徳島県勝浦町のビッグひな祭りは、地域的な特徴があるわけではなくごく一般的なひな祭りを素材としてイベント化に成功している。さらに同様のイベントが他の地域でも開催されるようになってきた。こうした地域的な特徴や相違のない民俗によるイベント化は、従来の民俗の資源化の視点で理解することは難しい。

そこで本稿では、一般的なひな祭りを素材としたイベント化の様相を明らかにし、その成立の要因を地域の動向を含めて分析することを目的としている。あわせてそのようなイベントが成立する背景となる、戦後のひな祭り行事の変容についても照射することも試みたい。これにより、現代の節供行事の変化の様相を示すことが可能になると思われる。

①……………地域おこしと民俗

(1) 地域の民俗の資源化

近代化の過程においては、地域の開発が進んでいくとともに、各地の生業も転換していくことで、人びとは必ずしもそこに定着することなく、人口の移動は激しくなっていった。こうして人々の生活は流動的となり、特に都市への人口集中が進むなかで、地方では過疎化が進行し、地域社会の維持が困難になっている。

現在、地域社会の活性化を図るため、多くの参加者を集める目的で各地でさまざまなイベントが開催されている。そのイベントの素材として、地域の民俗が注目され取り上げられることが多い〔岩本編 2007〕。こうした民俗は、地域に何らかのかたちで関係があるだけでなく、他の地域に比べて特徴や独自性があることで、他との差異化を図りイベント開催の正統性を主張することが可能となる。

民俗の利用による資源化は、文化財行政においても顕著に見られ、たとえば2001（平成13）年度から実施された「ふるさと文化再興事業」においては、その目的を地域の民俗文化の復興を目指しながら、それに伴って地域の活性化をも目指すものとされている〔文化庁伝統文化課 2002 14〕。つまり第一の目的は地域の活性化自体ではなく民俗文化の復興であるものの、実際にはその峻別は難しいものがあり、並行して行われる場合が多々見られる。

さまざまな民俗が資源として見いだされていく中で、祭礼は地域おこしの対象となり、地域の人々の参加だけでなく観光客も呼びこむものとして、従来から注目されてきた。特に都市祭礼では、地域のアイデンティティを形成するとともに、積極的に多くの人を巻き込むようにさまざまな工夫がなされている〔中野 2007 326-328〕。

こうしたなかで、必ずしも地域の民俗とは関わりのないものを取り入れイベントを行う場合も多い。しかしその場合には、正統とされる地域からの移植や連携という形態を採ることが多々見られる。例えば、東京都杉並区高円寺の阿波踊りは回を重ねて今では著名であるが、高円寺において阿波踊りをする必然性は特になかったため、徳島から阿波踊りの連⁽¹⁾を招いて関係を維持し、イベントを推進していった[松平 1990 248]。ほかにも埼玉県越谷市の南越谷阿波踊りなど、徳島県以外の地域で阿波踊りがイベントとして行われているが、その場合も阿波踊りの発祥とされている徳島市から踊りの連を連れてきている。これによって阿波踊りとしての正統性を担保しつつ、各地でイベントが行われていった。

(2) 一般的な民俗への注目

だが、上記のような地域の特徴ある民俗でもなく、一般的な民俗を資源化しているイベントが、今回取り上げる徳島県勝浦町のビッグひな祭りである。これは他の地域の雛祭りイベントとはその様相が異なっている。雛祭りイベントの場合も、基本的には地域の特徴的な民俗をその主要な構成要素にしていることが多い。

例えば、福岡県柳川市は、「さげもん」といわれる縮緬細工のつるし飾りを中心に、柳川の雛祭りの観光化が図られている。そして他の九州地域の雛祭りイベントのネットワーク化が進められているが、それぞれの九州各地にみられる独自の歴史的、民俗的特徴が強調され、相乗効果をねらって関連づけられて紹介されている。さらにさげもんのつるし飾りの特徴を全面に出して、類似の行事を行っている静岡県東伊豆町稲取と山形県酒田市が連合し、「日本三大つるし飾りサミット」としてネットワークを構築している[坂元・アナトラ 2010 64-65]。これにしても基本的にはその地域で行われていたものを素材としながら、そこに観光としての意義を見だし新たなイベントを創成していることとなる。

だが、この勝浦町のビッグひな祭りは、基本的には地域に特有な民俗として特徴があるわけではない。ごく一般的な雛人形を収集し大量に飾り付けることで、地域おこしのイベントとなっている。そして現在では4万人⁽²⁾の観光客を集めるようになっているのであった。

さらに勝浦町が生み出したこの方式が、たとえば千葉県勝浦市の「かつうらビッグひな祭り」のように各地に広がっていきイベントとして成功するだけでなく、新たな地域間のネットワークを作り出すことにもなっている。このビッグひな祭りのようなイベントは、従来みられるような地域の特徴ある民俗を利用する形態のイベントとは異質であり、日本全国でみられるごく一般的な雛祭りという民俗を資源化し成功している点で独特である。そこでこのイベントが成立する過程とその要因についてまず検討し、あわせてその背景となる現代の雛祭り行事の位置づけについて考察していきたい。

②……………地域の環境と生業

さてビッグひな祭りが開催されている徳島県勝浦郡勝浦町は、徳島県の南東部に位置し、県庁所在地の徳島市からは南西およそ20キロメートルにある。町の面積は69.80平方キロメートルであ

⁽³⁾る。勝浦町は四国山地から流れる勝浦川の中流域に広がり、街は川沿いの盆地に位置する。1955(昭和30)年3月1日、町村合併促進法の適用を受け、横瀬町と生比奈村が合併して勝浦町が誕生し、現在に至っている。

勝浦町の気候は太平洋岸式で高温多雨であるが、紀伊水道に面している徳島市に比べると内陸的な気候であり、寒暖の差が大きく多雨になっているという。データは古いが、1964(昭和39)年から1973(昭和48)年の10年間の平均気温は約16度、また降水量は2287ミリメートルである[勝浦町史編集委員会編 1977 15-17]。

人口は、2013年11月30日現在、5719人(男2737人、女2982人)で、世帯数は2153世帯、65歳以上の割合が全体の37.05パーセントとなっている。10年前の2003年11月30日のデータでは、人口6723人(男3246人、女3477人)で世帯数2109世帯、65歳以上の割合が30.17パーセントであり、当時と比べると人口が減少し高齢化率が上昇しており、世帯数自体は増加しているもの⁽⁴⁾の、一世帯あたりの構成員は減少し3人を切っている。

生業はかつて農業や林業が中心であったが、他の地域同様、第三次産業に移行している。国勢調査によれば、1955(昭和30)年に就業人口の69.65パーセントが第一次産業で、第二次産業13.20パーセント、第三次産業が17.15パーセントであったが、1980(昭和55)年になると、第一次産業が36.73パーセント、第二次産業が29.25パーセント、第三次産業が33.92パーセントとなって、農業を中心とした第一次産業が大幅に減少している。さらに2005(平成17)年には、第一次産業が27.69パーセント、第二次産業が23.25パーセント、第三次産業が48.63パーセントと、第三次産業が半分近くを占めるようになった。産業別詳細によれば、農業をのぞくと、卸売・小売業が14.99パーセント、建設業が11.66パーセント、製造業が11.06パーセント、医療・福祉が10.62パーセントであり、地元中心の業種が主となっている⁽⁵⁾。

かつて産業の中心であった農業は、米作や麦作とともにミカン栽培が重要であり、勝浦町は徳島県内で最も早くミカン栽培を始めた地でもある。旧生比奈村では、明治20年代からミカンを個別に栽培していたが、1908(明治41)年、村長の西村貞八氏を中心に生比奈村園芸会が創設され栽培を奨励し、大正期には開墾が進み重要な現金収入源となった。そして個人での出荷をやめ、出荷組合を創設して出荷するようになり、昭和期には直接都市の市場に卸すようになった。そして昭和初期の世界恐慌時には、ミカン栽培が農村振興施策のひとつとして、さらに奨励されたという。旧横瀬町でも、昭和初期に耕地整理組合を結成し、山林を開墾してミカン園にしていった。こうして現在の勝浦町域全域でミカン栽培が盛んになっていったのである[勝浦町史編集委員会編 1977 866-887]。戦後もミカン栽培は重要な収入源であったが、昭和50年代になると全国でミカン生産が盛んになったことで供給過多となり価格は下落し、また大寒害が発生したことで[勝浦町史編集委員会編 1981 1190-92, 1210-1212]、次第に栽培は衰退していった。こうした状況と並行して町の人口も減少して過疎化が進行し、町の活性化が模索されるなかで、ビッグひな祭りが誕生したのである。

③……………ビッグひな祭りとその実施組織

(1) ビッグひな祭りの概要

ビッグひな祭りは、2013年で25回を迎える巨大な雛祭りイベントである。2012年度には、2月19日から3月20日まで31日間開催された。会場は現在、勝浦町大字生名字月ノ瀬にある「人形文化交流館」という専用の施設であり、これはNPO法人阿波勝浦井戸端塾が所有している。

この施設は、かつて製材所であったので体育館のように天井が高く巨大な空間となっている。その中央には、高さ8メートルのピラミッド状の雛段が据えられている（写真1）。階段のように25段の雛段が四方に広がっているので、合わせて計100段となる。25段の雛段は幅約2メートルで下まで連続しているため、側面から段の構造が見えてしまう。よって側面の4カ所にも、三角状に段を組んで人形を飾っている。よってその様子はまさに赤いピラミッドである。

ピラミッド状の最上段中央には懸崖状の桜の造花を立て、その周囲に御殿飾りの雛人形を四方に向けて飾り付けている（写真2）。この御殿飾りはこの地方で第二次世界大戦後に流行したものであった。その下の段には金屏風を立てて、内裏雛をはじめさまざまな雛人形を棚いっぱいになべている。そしてそれぞれの棚の両端には左近の桜と右近の橘の飾りを置いているので、それがピンクとグリーン縦のラインとなって、雛段を明確に区切り、遠目からもインパクトを与えるようにな



写真1 ピラミッド状の雛段

っている。

さらに入口以外の施設壁面3面には、7段飾りの雛段を所狭しと連続して並べて飾ってある(写真3)。来館者はこれらの中から気に入った雛人形を5000円で買い取ることもできる。この制度を単に販売とはいわずに「里親制度」と呼んでいる。不要になってビッグひな祭りに持ち込まれた雛人形を必要な人に大切に受け継いでもらいたいということで、里親という擬人化したタームを使ってその意図を表現している。

現在、運営費として大人300円、小学生100円の入場料を徴収しており、2013年には小学生以上の有料入場者30500人、そのほかイベント出場者1500人、乳幼児の約8000人で、計約4万人の入館者がいる。⁽⁶⁾ 其中では団体も多く、周辺の老人福祉施設や観光バスツアーなどでやってくる人も多い。観光バスツアーは、鳴門の渦潮や阿南市の梅林などと組みあわせたもので、近畿圏からの観光客である(写真4)。

(2) ビッグひな祭りの始まり

このビッグひな祭りは、町役場の若手職員有志10人で立ち上げた組織「ちえぶくろ」によって発案され、第1回は1988年4月2日、3日の2日間にわたって開催された。ちえぶくろは1985(昭和60)年に立ち上げられ、毎月会議をもち観光資源の開発や町の活性化を話しあっていたが、なかなか良い案が見つからないなかで、家庭に眠っている雛人形に注目したとい

う。そして地域が誇れるものとして全国に発信できるイベントを目指して企画されたのが、このビッグひな祭りであった。

その際、ただ雛人形を飾っただけでは特徴がないので、インパクトを与えるために100段雛飾りを挑戦することになった。しかし、100段の雛段を直線的に単純に組んでいくとなると、高さだけが異様に大きく雛段として安定感がなくなり安全性が確保できないため、直線的な100段雛飾りは断念せざるを得なかった。しかし100という数字の持つインパクトをあきらめきれず、それなら合計して100段ならいいということで、四方に25段ずつ分けるかたちで段を組み、100の数⁽⁷⁾を確保することとなった。その大きさは当初段の幅2.1メートル、高さ3.4メートルの25段であった。



写真2 雛段の上部



写真3 7段飾りが並ぶ壁面



写真4 バスツアーの案内

第1回のイベント会場は、勝浦町三溪の農村勤労福祉センターであり、ここは体育館であった。結局、四方に広がる形で雛人形を飾ることで面積のある体育館では周囲を回って四方から見学可能となったので、外観上も優れており、以後これが基本的な形態として現在まで引き継がれている。

しかし、当初の企画では地域の民俗と全く断絶していたわけではなく、むしろ関連を持たせていた。例えば開催日である。第1回は4月の2日、3日の2日間であるが、これは勝浦町も含め徳島地方の雛祭りが、当時、旧暦3月3日からの移行で月遅れの4月3日に行っていたからであった。そのため宵節供となる前日の2日からの開催となったのである。

そして『徳島新聞』（昭和63年4月3日付）によれば、「開場とともに二重、三重の重箱を持った親子連れが三々五々と訪れ、見事なひな人形を眺めながら重箱を開けてごちそうに舌鼓を打った。」とあり、人々は単に雛人形を見に来るだけでなく、弁当を持ってきている。この弁当というのは、やはり勝浦町を含めて徳島一帯にある遊山箱の風習である（写真5）。かつて旧暦3月3日には、海辺の地域では浜へ、山間部では野に遊びに行く。その際、子供がそれぞれ手提げのついた小型の重箱におかずと寿司とお菓子を詰めて持って行き、弁当を食べながら遊んだという〔三宅 2006 79-88〕。つまり、野山でかつて遊山箱を持って遊びに行っていた節供の行事を、そのときには体育館においてやっていたのである。

この第1回のビッグひな祭りで飾り付けられた雛人形は、町の広報や新聞の地方版などで呼びかけて集めたものであった。すると町内だけでなく徳島市、小松島市など周辺市町村からも申し出があり、企画したちえぶくろのメンバーは、車で方々に人形を取りに行ったという。またメンバー宛に直接郵送したり、持ち主が持参することもあった。

当初の計画では雛人形は借用しイベント終了後には返却するつもりであった。返却のため、所有者の名前を入れたりするなどの準備などをしていった。しかし、人形を提供する人は、返却は不要で逆に返してもらっても困るという人が多かったという。そこで、人形は返却しないことにし、初年度で3000体もの雛人形が集まった。

（3）主催する組織と法人化

さてこのイベントは完全に地域おこしとして開催されたものであり、その中心となったのは、町役場の職員有志であった。しかし、このイベントを継続的に実施するには苦労を伴った。それは公務ではないため、その準備は勤務時間外だけの活動となったからである。当時からちえぶくろで中心的に活躍しており、2013年現在、町議会副議長である国清一治氏によると、公務員という立場から公私の別はかなり意識して活動したという。

そこで、活性化を図るための民間団体を作った方が自由に活動できるのではないかと意見もあ

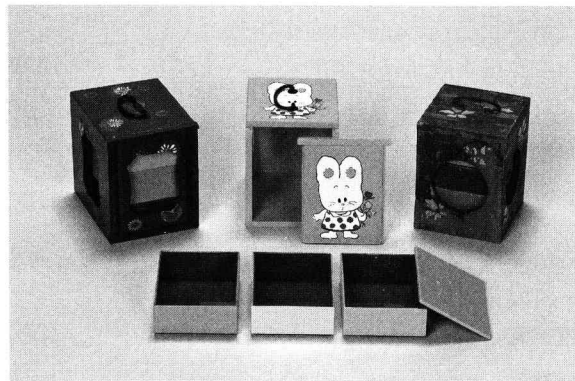


写真5 遊山箱（本館蔵）勝田徹氏撮影

り、町の活性化グループ「勝浦井戸端塾」がビッグひな祭りを引き継いでいくこととなり、第4回目からは勝浦井戸端塾が主体となった。この勝浦井戸端塾は、当時の徳島県知事の発案で作られた「井戸端会議」を母体としている。この施策は、各地で地域おこしを進めていくには住民自らが井戸端会議的な話し合いの場をもつ必要があるということから、官民一体化した機動的な組織に、徳島県から活動の補助金が与えられるものであった。勝浦町ではこの井戸端会議を県下で3番目に始めたという。

そのなかで当時の図書館長であり、元中学校教諭で最後は校長も勤めた殿川武男氏を中心になって、ちえぶくろのメンバーであった国清一治氏等とともに、井戸端会議を母体として、阿波勝浦井戸端塾を組織した。初代理事長でもあり名誉会長でもある殿川氏は、グローバルな社会作りをつねに提言し持論にしていた。中学校長在職時には、家庭でのグローバル化を進めるため、台湾への研修旅行を実施し、生徒だけでなく親も同伴して見聞を広めるようにしたという。

ビッグひな祭りの母体が阿波勝浦井戸端塾に移行したが、実質的なメンバーはほぼ重なっていた。そして井戸端塾という民間団体になったことで、公務員としての制約がなくなり、活動が自由にやりやすくなっていった。さらに特定非営利活動促進法（平成10年3月25日法律第7号）が制定されると、すぐに法人化を図りNPO法人阿波勝浦井戸端塾として現在に至っている。

この法人化によって、じつは実施の上で大きなメリットが生まれた。それは法人格の取得によって、ビッグひな祭り専用の建物を所有することが可能になった。これが勝浦町生名月ノ瀬にある現在の人形文化交流館である。

この建物は、もと製材所であり倒産して競売にかけられることになった。そこでメンバーが資金を募り1000万円を用意したという。競売によって850万で落札することができ、別に修復費を2000万円を調達し、現在のように展示をすることが可能となった。そして、2005年の17回ビッグひな祭りから、新会場である人形文化交流館で開催するようになった。

自前の専用施設によって、準備や片付けがメンバーの都合にあわせて行えるようになり、その負担は相当減少した。かつて体育館を使用していた頃には、他の利用もあるので借用期間を長くすることができず、準備や片付けを短い日程で行わなければならなかった。特に役場に勤めている人々は勤務時間外にしか対応できないため大変であったという。こうしたことから、専用の建物を入手したことで時間的制約がなくなり、より手間のかかった大規模なイベントを開催することが可能となった。

専用会場になると雛段も大型になっていった。当初は高さ4メートルもなかった25段の雛段は、人形文化交流館になると段数は変わらないものの総高8メートルになり、その規模は倍以上になる。そして規模の大きさから始まったイベントは、その大きさをさらに大きくすることで、ビッグひな祭りの中核として位置づけられていった。

④……………イベントの正統性とその資源

(1) 雛人形の歴史の表現

ビッグひな祭りを開催している勝浦町は、それまで特に雛祭りが盛んであったというわけでもなく、流し雛のような地域特有の儀礼があったわけでもない。第1回のイベント開催時に人々が持ってきた遊山箱は、なにも特に勝浦町だけにあったわけではなく、徳島県下一帯の民俗である。つまり勝浦町はごく一般的な雛祭りをおこなう一地域でしかなかった。

しかし、地域おこしの素材として選択したのが雛人形であり、巨大な雛段にそれを飾ることで、現在では「ひなの里」といわれるようになったのである。2011年には隣接する場所に道の駅ができ、その名前も「ひなの里」と命名された。それを定着させるためには、さまざまな展示やイベント等が繰り返し行われていった。

まず、古い雛人形の展示をすることで、雛祭りの歴史的な正統性が表出されることとなった。中央の巨大な100段雛飾りを取り囲む壁面の一つには、ガラスケースを設置し近世期以降の雛人形を展示している(写真6)。会場の中央にある100段の雛段に飾る人形は、ケースを用いないオープン展示である。一方、ケース内の人形は江戸時代からはじまり、明治、大正、昭和と時代の連続性を人形によって表現している。江戸時代の人形は衣装着の内裏雛ではなく、浮世人形である2体の竹田人形である。そして明治大正期は古今雛で数も最も多い。古今雛は、近世から流行したものであるが、展示している雛人形自体は近代のものである。しかし100段の雛段などの現代の雛人形とは、形式が全く異なっているため、時間的な差異を感じさせ、むしろ雛祭りの歴史的な連続性を提示している。そして昭和時代として2組の雛人形を展示して歴史展示を終えている。露出している多数の雛人形が今につながる現代的なデザインであるため、ケース内はそれと対比する形で一連の歴史



写真6 古い雛人形のケース



写真7 全国の変り雛

性を強調することとなる。

一方で、「全国変わり雛」というテーマで全国の郷土玩具的な雛人形を段上に展示している（写真7）。これは国清氏夫妻が積極的に各地を回って集めたものである。これによって、各地の民俗的な多様性を表現することとなる。つまり古い雛人形によって歴史的な変遷とその正統性を表現する一方で、民俗的な多様性をみせることで、雛行事が地域の中に組み込まれていることを表現し、時間の縦軸と地域の横軸の中に、ビッグひな祭りを位置づけることになったのである。

（2）雛に関わる民俗の流用

ビッグひな祭りのなかで重要な儀礼が「雛供養」である。しかし雛供養は、25回開催されていくなかで、その内容と意味づけが変化している。神事に関しては、勝浦町星谷にある大宮八幡宮の宮司が初回から担当している。

当初の雛供養は、イベント開催後の段階で、破損したりして使用できない雛人形を大宮八幡宮境内にて祈祷とお焚き上げをしていた。丸太を井桁に組んで使用できない人形を燃やしてその前で祈祷をするものであった。つまり対象は完全に壊れた人形の供養である。しかし、野外の焼却によるダイオキシン発生問題が全国で指摘されるようになると、自主的にお焚き上げをやめた。

それ以降は雛供養の形式を変え、人形を飾り付ける前の2月の初旬、人形文化交流館において、全国から寄贈された人形すべてに対し雛供養が行われるようになる。そしてこの供養を経てから飾り付けをするようになった。この供養を行うことですでに人形としての役目を果たしたものと位置づけることができ、後にも述べるがおひな街道において屋外で使用して痛んでいくことを承知で使っていくことも可能となった。こうした供養という装置があり、その位置づけが変わることで、イベントの方式が広がっていった。

さらに初節供をイベントの中に取り入れるようになる。その年に初節供を迎える女の子を招いて、巨大な雛段の前で写真を撮る企画が継続している。これにより、ビッグひな祭り自体は、家の行事である雛祭りの役割を終えた雛人形を中心として楽しんでもらうためのイベントであったが、それだけでなく家庭を中心として今なお行われている初節供も、積極的にイベントの中に取り込む形で総体としての雛祭りを包含していった。

（3）雛祭り以外の流用

雛人形としての正統性を表現する一方で、直接的には結びつかないものまでも、ビッグひな祭りに結びつけてイベント化を図ることも行われている。それが人形文化交流館の入口に立てられた「ビッグひなツリー」である（写真8）。これは2011年につくられたものであるが、ドラム缶を積み上げて頂上に人形の顔を作り、青と赤で男雛と女雛を造ったものである。それぞれに名前がついており男雛は「ひな太郎」、女



写真8 ビッグひなツリー

雛は「ひなの里子」である。人形の高さは6.34メートルであり、ちょうど同じ年に開業した東京スカイツリーの100分の1に設計してある⁽⁸⁾。つまりスカイツリーにあやかりながらも、そこに自らの意味づけを生み出し、第1回のビッグひな祭りが昭和63年4月であることから、それをふまえたものとしている。しかもドラム缶を積み重ねた細長い形態を「トーテムポール^(ママ)」と称しているのも、直接雛行事とは関係のないトーテムポールからの流用である。こうした二重の流用ながら、命名においては「ひなの里」という一番の地域の看板を背負わせることで、入口の中心的存在として位置づけている。

また人形文化交流館内においても、地域で行われていた人形浄瑠璃の舞台を設置し、「勝浦座」と命名している（写真9）。これは開会式などにも利用できるステージであり、浄瑠璃専門の舞台でというわけではない。そしてイベント開催中には、「傾城阿波の鳴門」を上演する。そこで必要な舞台や椅子は、徳島市にあった県の施設であるアクティー徳島に設置されていたもので、施設の改修に伴い不要になった設備を県の許可を受けて譲り受け、自ら解体して運んで人形文化交流館に設置したものである。つまり浄瑠璃人形自体は、直接雛祭りとは関係のないものであるが、この地域で盛んな人形浄瑠璃とともに人形として位置づけていくことで、ビッグひな祭りに包みこんでいき、イベントを拡大していくのである（写真10）。



写真9 人形浄瑠璃の舞台



写真10 二階のケース人形

⑤……………広がるイベント

(1) 勝浦町内へのイベントの拡大

さらに人形文化交流館だけで開催するのではなく、その周辺地域へも雛祭りが拡大していった。勝浦町の西部に位置する坂本地区では、小学校が廃校となりその建物を利用して「ふれあいの里坂本」というグリーン・ツーリズムを行う宿泊施設が2002年3月に設立された（写真11）。そして開館記念として、ビッグひな祭りに関連したイベントも行うこととなりその内容が検討された。その結果「おひな様の奥座敷」の名称で、人形文化交流館とは異なる趣向の雛祭りを開催することになった。それは、段飾りという通常の装飾法を取り入れずに、雛人形を使って新たな空間表現を行うようになったことで、差異を強調することが可能になった。

具体的な手法として、ふれあいの里坂本の体育館を会場とし、個人や地域の団体に約5平方メー

トル程度の空間を貸与して、それぞれが思いおもいに装飾してもらう形態を採った（写真12）。参加しているのは、福祉系の団体や地域の趣味のサークル、小学校の組や個人である。例えば2011年の場合、サルビアという福祉作業所では、「勝浦川の辺にて」というテーマで、たくさんの水色のビニール紐を川のように横に流線型に置いてその周辺に雛人形を配している（写真13）。さらに毯などのおもちゃも雛人形のそばに一緒におくことで、川辺で遊ぶ雛人形を表現している。

勝浦町総合型地域スポーツクラブである「どろたんぼカーニバルKフレンズ」では、雛人形でさまざまなスポーツ競技の風景を表現した。中央にはバレーボールをする雛人形を飾るため、コートを模した白い枠を作って真ん中にネットを張り、ネットを挟んで雛人形を配置しボールをおいている（写真14）。さらに手前では小さな卓球のラケットを人形とともに配している。その周囲には会員の実際のスポーツの様子を写した写真を掲示しているので、舞台上での雛人形のスポーツを通して、組織の内容も表現するようになっている。

このように、従来の飾り方にこだわらず平面に自由に雛人形を置いて新たな表現形態を、「おひな様の奥座敷」では採るようになった。これについて開催当初から運営に関わっている坂本グリーンツーリズム運営委員会の穂台千鶴氏は、人形交流文化館との違いを出すために考えたのが、雛人形自体に楽しんでもらおうという意図で参加者に飾ってもらうことであった。雛壇ではなく平面的に雛人形を飾ることにに関して、穂台氏はすでに自宅で長女の7段飾りの雛人形でそれを試みていた。それは、かつて人権研修に参加した際、講師の話の中で、雛人形の段飾りも身分のヒエラルキーの



写真11 ふれあいの里さかもと



写真12 体育館の内部



写真13 サルビア作業所の展示

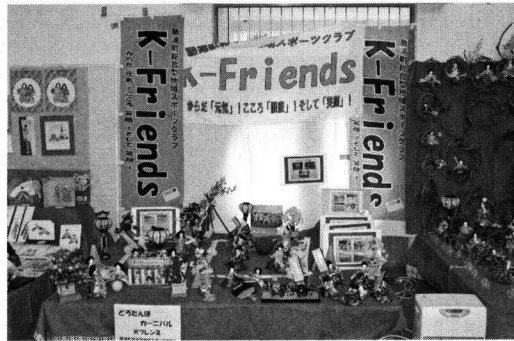


写真14 どろたんぼカーニバル
Kフレンズの展示

表現ではないかとの話が印象に残っており、自宅で雛段に飾らず平面に雛人形を飾ったことがあった。その平面の飾りがよいこともあり、また雛人形自体に楽しんでもらいたいということで、平面の創造的な飾りをコンセプトにしたという。

雛人形の飾り方の制約が外され、完全に創造的な展示として行っているのが「森本家」である。坂本地区の最も奥に位置する旧家森本家は、まさに屋敷の庭と離れの座敷を全面的に利用して雛人形を飾り、来訪者に開放している（写真 15・16）。このビッグひな祭りにおいて通りに面した部分だけを利用しての雛飾りは道沿いに多々みることができる。しかしこのように敷地内のかなり広い範囲で見せる家は森本家に限定される。

2011 年の森本家は、「遊び」をテーマに雛人形が飾られた。内裏雛を 4 体飾り小さな扇子をもたせて投扇興の様子を表現したり、また内裏雛 3 体でカルタを取り囲んでカルタ取りの様子をつくったり、また本物の琴を中心に女雛 2 体がそれを弾くように配置し、手前には五人囃子が置かれており琴を奏でる様子を雛人形で構成している（写真 17）。また源氏物語第三帖のなかで、空蟬が碁をしているところを光源氏が御簾の間から覗いている様子を男雛 1 体と女雛 2 体で作っている。ちょうど雛人形用の御簾をそのままうまく利用している。また古い双六を広げてその周りに人形を配置することで双六遊びの様子も飾っている。そして縁側では、竹取物語を題材にして、斜め切りをした青竹の中に小さな人形を入れ、高砂と思われる翁、媼の人形をおいて、かぐや姫発見の場面をつくりだしている。その隣には、いよいよかぐや姫が月に帰っていく場面で、男雛などをつかって帝



写真 15 森本家の案内看板



写真 16 森本家入口の門



写真 17 離れの座敷



写真 18 縁側の竹取物語

の使いたちを表し、三人官女や女雛を使って、月に帰るかぐや姫とそれを引き留めようとしている女官たち、そして、天に昇る様子的のために、雛道具の駕籠を使ってそれを竹からつるして宙に浮いている様子を表現し、まさにかぐや姫が天に昇っていく様子を、既存の雛人形で作り出しているのである（写真18・19）。

こうして、雛人形を使つての新たな表現がふれあいの里坂本では行われている。しかし最近体育館に参加する団体の中には、雛人形は添え物的となつて、書や絵などの作品を中心に展示する作品展のような構成も見られるようになってきた。ただし、多くの展示は人形に楽しんでもらうというコンセプトのもと、人形を使つた新たな展示でありその差異化によって、多くの見学者を集めるようになった。またこうした見学者がいることで、

森本家をはじめとして展示の製作者は、毎年工夫を凝らしたものを考えそれを楽しんでいるという。

奥座敷として展開した坂本地区は、県道16号線からふれあいの里さかもとおよび森本家に至る道筋にも、ひな人形を使つた装飾が展開されるようになる（写真20・21・22）。沿道の家の軒先や庭先、石垣などを使って雛人形を飾り



写真19 縁側の船遊び



写真20 坂本おひな街道①



写真21 坂本おひな街道②



写真22 坂本おひな街道③



写真23 商店街の雛飾り

込んで、これを「おひな街道」と称している。こうして雛飾りは、点から線へと発展しているのである。

さらに徳島市から勝浦町を通り上勝町へ抜ける県道 16 号線は勝浦町のメインストリートであるが、そこに展開する西岡商店街や横瀬商店街もそれぞれの商店の店先に雛人形を飾っており、西岡おひな街道、横瀬おひな街道として、勝浦町を線でつなぎ、ひなの里と自称するように、2 月から 3 月にかけてはメインの道路は緋毛氈で華やかになる（写真 23）。

（2）形成される他県とのネットワーク

勝浦町内において人形交流文化館を中心に坂本地区など雛祭りイベントは拡大していったが、また全国的なネットワークも形成してきたのであった。

もともと勝浦町は、勝浦という名称が同じ市町村と「全国勝浦ネットワーク」を形成し、千葉県勝浦市、和歌山県那智勝浦町との交流が続いていた。そこで 2001 年には千葉県勝浦市に人形 3000 体とともにそのノウハウをふくめて提供したことで、2001 年から千葉県勝浦市で「かつうらビッグひな祭り」が始まった。

さらに 2012 年、和歌山県那智勝浦町では深刻な台風被害を被ったが、その救援イベントとして始まったのが 2013 年春から始まった「南紀勝浦ひなめぐり」

である。これも雛人形を提供するだけでなく、国清氏夫婦が人形を持参して那智勝浦駅にいて飾り付けをした。7 段の小型ではあるが、やはり地元のビッグひな祭りのようにピラミッド型に四方に伸ばした形態で最上段には御殿雛を置いているものであった。このように基本的形態を踏襲しながらも、各地に広まっていくなかでしだいに変化している部分もある。

その他にも、岐阜県郡上市や和歌山県海南市、香川県東さぬき市引田町、愛知県豊田市足助町などにも、雛人形とともにそのノウハウも提供し、それぞれの地域で雛祭りイベントが行われている。また海外のアメリカやフランス、ポルトガル、イギリスにも雛人形を依頼に応じて贈っているという。こうして形成されたネットワークによって、各地の雛祭りイベントに関する情報を共有し、人形文化交流館において、それぞれのイベントのパンフレットや日程の一覧表なども掲示している。そして各地のイベントの主催者たちと情報交換を頻繁に行っており、それをもととしたさまざまな交流も継続しているという。

地域おこしとしての雛人形の提供だけでなく、東日本大震災では「被災地に春と」ということで、津波被害の大きかった宮城県南三陸町のホテル観洋に、ピラミッド型の雛人形を提供した（写真 24）。こうした熱心でボランティアな対応によって、各地に一般的な雛人形による地域イベントが成立していった。



写真 24 宮城県南三陸町の雛飾り

⑥……………結びにかえて

勝浦町のビッグひな祭りは、もともと地域の特徴的で独自の民俗を掘り起こして地域おこしの対象としたわけではなく、雛祭りの雛人形というごく一般的なものを、大量に収集し、それを他にはない飾り方で見せることで、イベント化に成功したものであった。

当初は、むしろ地元の人びとを呼び込むために、月遅れのひな祭りを行ったり、遊山箱による遊びを呼びかけたりと一応地域の民俗に連関する形態をもっていたが、次第に外に誇れるものということで、町外の観光客を呼び込むように変化していき、地域にはなかったさまざまな民俗を積極的に取り込んでいった。外部からの観光客にとっては、誰もが知っている雛祭りではあるものの、すでに家庭では行われなくなっていることも多く、巨大化された雛段といった話題性によって興味を示し人々が集まってくることとなった。

こうした外部からの視線によって、それを提供する側は、見せるための雛かざりとして、より巨大化し、また話題となったものを雛祭りに関連づけて作り出すなど、毎年さまざまな工夫を凝らすこととなる。とくに坂本地区のように、雛人形を使った新たな表現形態をとることによって、雛人形の飾り方にバリエーションが生まれ、見られることを意識してより工夫を凝らし、それを楽しみとしてより装飾を凝らすようになっていった。

こうして、地域おこしとして外部の人を呼び込むことを目的としながらも、仲間とともに実践し、ともに楽しみを分かち合いながら、多くの見学者を集めることで達成感をもたらしている。さらに積極的にそのノウハウを提供することで、他の地域間との関係を構築し交流が発展している。

実はこのようなイベントで展示されている雛人形は全国から集められたものであり、基本的には高度経済成長期以降に家庭で購入され、子どもが大きくなったことでその役割を果たし、家庭では処分に困っているというものであった。つまり時代の変化の中で生み出された産物であった。それはすでに役割を果たした人形の第二の人生が、地域おこしの観光資源として見いだされたわけであり、家庭での年中行事であった節供が姿を変えて観光のなかに現れたのである。

謝辞

NPO法人阿波勝浦井戸端塾の国清一治氏、稲井稔氏をはじめ会員の方々、またふれあいの里さかもとの隠台千鶴氏をはじめ坂本グリーンツーリズム実行委員会の方々、森本友章氏には調査に際し大変お世話になりました。謝してここに記します。

註

(1)——阿波踊りの踊り子のグループをいい、踊りや楽器などに役割が分かれる。

(2)——2013年度(2月24日から4月7日)の入場者数である。

(3)——徳島県勝浦町ホームページ、沿革、位置、主な

山岳と河川(<http://www.town.katsuura.lg.jp/docs/201011600820/>) (2013.12.12 閲覧)

(4)——徳島県勝浦町ホームページ、勝浦町の人口と世帯数(<http://www.town.katsuura.lg.jp/zokusei/jinko-setai/>) (2013.12.12 閲覧)

-
- (5)——徳島県勝浦町ホームページ, 産業(<http://www.town.katsuura.lg.jp/docs/2010111600660/#sangyou1>) (2013.12.12 閲覧) 総会資料
(6)——N P O 法人阿波勝浦井戸端塾平成 25 年度通常 (7)——『徳島新聞』昭和 63 年 4 月 3 日付
(8)——東京スカイツリーは 624 m である(<http://www.tokyo-skytree.jp/archive/spec/>)。
-

参考文献

-
- 岩本通弥編 2007 『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館
勝浦町史編集委員会編 1977 『勝浦町前史』勝浦町
勝浦町史編集委員会編 1981 『勝浦町後史』勝浦町
坂元一光, アナトラ・グリジャナティ 2010 「ひな祭り行事の再構築と女性の手工芸運動」『九州大学大学院教育学研究紀要』13 号, pp.61-75
中野紀和 2007 『小倉祇園太鼓の都市人類学—記憶・場所・身体』古今書院
平出鏗二郎 1971 (1901) 『東京風俗志』新装版 原書房
文化庁伝統文化課 2002 「ふるさと文化再興事業—伝統文化の保存・活用による地域おこし」『月刊文化財』平成 14 年 9 月号, pp.10-16
松平 誠 1990 『都市祝祭の社会学』有斐閣
三宅正弘 2006 『遊山箱—節句の弁当箱』徳島新聞社
山田慎也 2011 「雛祭りの民俗」『和宮ゆかりの雛飾り』国立歴史民俗博物館

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014 年 1 月 21 日受付, 2014 年 5 月 26 日審査終了)

Hina-doll Festival to Revitalize Communities : A Case Study of the Big Hina-doll Festival of Katsuura Town in Tokushima Prefecture

YAMADA Shin'ya

This article aims to reveal how folk customs manifest themselves in the modern society. To this end, the Big Hina-doll Festival in Katsuura Town, Katsuura District, Tokushima Prefecture, is used as a case study to analyze how and why a folk custom has developed to an event that represents and revitalizes a community even though it is not original or indigenous to the community.

Katsuura Town, Tokushima Prefecture, was the first town in the prefecture to start orange cultivation before World War II and prospered as an orange-growing town until around the late 1960s to the early 1970s. Then, with the decline of orange cultivation, the town, like so many others, suffered depopulation. Against this backdrop, the Big Hina-doll Festival was held to revitalize the town in 1988, since when it has been held annually up to the present time except for one year. This was originally designed for town people and led by the town office staff who aimed to make it a nationally recognized festival. Although neither hina-doll festival nor hina dolls were unique to the town, the event distinguished itself by displaying a great number of hina dolls collected from households in and around the town on a huge red-carpeted staircase.

Then, with more town people joining the management, the festival was transferred from public to private hands, and a private association possessed premises as a venue for the festival. Thus, by privatizing the festival, a variety of limitations due to being a public event were removed. Moreover, the adoption of new creative ways of displaying hina dolls enhanced the flexibility for town people to participate in the festival. This novelty drew a large audience from in and around the town, and the festival gradually grew to an event that attracted tourists from all over the prefecture and the Kinki Region. Furthermore, the town increased the national recognition of the festival by providing its know-how, as well as collected hina dolls, for municipalities requiring revitalization programs all over Japan.

The reason behind this success was because the festival was recognized as a new opportunity to reuse hina dolls which had spread throughout the country since the end of World War II along with the custom of the Girls' Festival in March and then been packed away at households as their daughters grew up. This also reflects the contemporary development of folk customs that hina dolls are shared through tourism after they were no longer used at home.

Key words: hina-doll festival, national rituals, community revitalization, non-profit organizations, seasonal festivals, Big Hina-doll Festival
